

6 3 6 1 - 1 3 7
平成 1 7 年 1 0 月 2 7 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 7 号について
平成 1 7 年度病害虫発生予報第 7 号を発表したので送付します。

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 7 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	アブラムシ類	並	2
	ハスモンヨトウ	並	2
	コナジラミ類	多	2
	(シルバーリーフコナジラミ及び タバココナジラミバイオタイプ Q)		
冬春キュウリ	べと病	やや少	2
	うどんこ病	やや少	3
	褐斑病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	並	3
	うどんこ病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	4
	黒枯病(仮称)		4
冬春トマト	葉かび病	並	4
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	前年より多い	4
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	4
	ハダニ類	多	5
カンキツ類	ミカンハダニ	やや多	5
チャ	カンザワハダニ	やや多	5

冬春キュウリは生育初期～収穫始期、冬春ピーマンは定植直後、冬春トマトは生育初期、冬春イチゴ生育初期、温州みかんは収穫期、茶は秋芽生育期であった。

11月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並か高い、降水量は平年並と予想されています。
(1か月予報 鹿児島地方気象台 10/21発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の冬春ピーマン及び冬春キュウリ、秋冬ダイコンでの発生は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) キュウリやピーマン等多くの作物のウイルス病を媒介するので、有翅虫の飛来防止に努めるとともに、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を定期的に行う。

2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の巡回調査では、冬春キュウリ、冬春ピーマン及び冬春イチゴで食害の発生を確認している。
- 2) フェロモントラップの誘殺状況は、都城市及び西都市で10月上旬に一時的に多くなったが現在は平年より少なくなっている。また、佐土原町(農試内)では平年より少ない状況が続いている。

[防除上の注意]

- 1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。
- 2) 施設内で発生すると天敵類が少ないこと、施設内気温が高いことから増殖が続くので注意が必要である。

3 コナジラミ類(シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミ バイオタイプQ)(多)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の冬春トマトでの発生面積率50.0%(平年28.9%)、百葉当たり虫数3.3頭(平年0.6頭)は平年より多である。
- 2) 10月中旬の冬春キュウリでの発生面積率50.1%(平年34.5%)、百葉当たり虫数4.0頭(平年5.8頭)は平年並である。
- 3) 10月中旬の冬春ピーマンでの発生面積58.3%(前年54.5%)、百葉当たり虫数3.6頭(前年4.0頭)で、前年と同様に多い傾向にある。

[防除上の注意]

- 1) 施設開口部に防虫ネット等を設置して飛来防止に努める。
- 2) 発生を確認したら早めに防除する。なお、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。

平成17年度病害虫発生予察注意報第9号(10月25日発表)参照

” 病害虫発生予察特殊報第1号(10月4日発表) ”

” 病害虫防除情報第4号(9月14日発表) ”

冬春キュウリ

1 ベと病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率6.3%(平年11.0%)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときには激発しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。

2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率12.5%(平年28.7%)、発病葉率1.0%(平年3.7%)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率18.8%(平年14.8%)、発病葉率2.3%(平年1.6%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 摘除した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の巡回調査では16ほ場中3ほ場で微発生が確認された。

[防除上の注意]

1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、除湿に努める。
- 2) 病原菌が侵入した後の防除効果が低いので予防散布を行う。

2 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率16.7%(平年5.2%)、発病葉率0.8%(平年0.2%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率25.0%(平年33.1%)、10花当り寄生虫数0.5頭(平年0.8頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度の内に防除を徹底する。

4 黒枯病(仮称) (-)

[防除上の注意]

- 1) 10月中旬の巡回調査ほ場では12ほ場中1ほ場で発生を確認している。
- 2) 多発してからでは防除が困難となるので、早期発見に努め初期防除を徹底する
- 3) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う
- 4) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病(TYLCV) (前年より多い)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の巡回調査では12ほ場中5ほ場で発生を確認している。

[防除上の注意]

- 1) 生育初期に感染すると被害が激しく全滅する場合もあるので、発病株はすぐに抜き取り放置せず埋没処理を行う。
- 2) コナジラミ類(シルバーリーフコナジラミ及びタバココナジラミ バイオタイプQ)によって媒介されるので、施設開口部には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットを設置して施設内への侵入を防止する。
- 3) 施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 4) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

平成17年度病害虫発生予察注意報第10号(10月25日発表)参照

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率27.3%(平年12.7%)は平年並、発病葉率3.6%(平年1.4%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きは場内に放置しない。

2 ハダニ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率36.4%(平年22.6%)は平年よりやや多、寄生株率17.3%(平年4.5%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

平成17年度病害虫発生予察注意報第11号(10月25日発表)参照

カンキツ類

1 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率55.0%(平年47.1%)は平年よりやや多、寄生葉率13.5%(平年15.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%、10葉当たり虫数5~10頭を目安に、増殖初期に防除を行う。
- 2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

チャ

1 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率58.8%(平年30.5%)、寄生葉率7.2%(平年4.0%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

（平年値は過去10年間の平均）

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp